

キヤラクター明確に

市場の課題で 講演、デイスカッション

パーソナル情報システム(片桐正雄社長、東京都港区)は、第34回目となる「全国生鮮流通フォーラム」をオンラインで開催した。講演を行った農水省食料産業局食品流通課の武田裕紀課長は、卸売市場の課題として「キヤラクターの明確化」「物流改善、施設のフル活用と機能強化」「デジタル化・自動化」を挙げた。その後のパネルディスカッションでは、青果卸2社、水産卸1社の社長が加わり3つの課題を中心に取り組みや課題を報告した。

武田課長は、昨年の改正卸売市場法の施行にともなう卸売市場の認定数が増え、中央市場では40都市・65市場で改正前と実質的に変わらず、地方卸売市場では約100市場減の911市場と説明。「サンライチエーンにおける市場のシェアはこれまでと大きく変わらないので」と報告した。

一方、卸売市場の課題のうち「キヤラクターの明確化」では、「生産者や出荷者、買受人、実需者が何を求めているのかを今一度明確化する必要がある」と呼びかけた。また、

「生産者や出荷者、買受人、実需者が何を求めているのかを今一度明確化する必要がある」と呼びかけた。また、

果がコマ卸大手の神明ホールディングスと資本業務提携をしたことに触れ、「輸出も含めて新しい事業に打って出る」とした。シテイ青果では国際認証 F S S C 22000に基づく食品の安全管理を行っており、輸出の際の強みに挙げる。さらに水産部と連携してのキット、果物のセットなどの商品化で付加価値向上を図る。そのうえで、神明グループの成田市場青果(千葉県・成田市公設地方卸売市場)とも連携しての海外販路拡大の可能性を挙げた。

福岡大同青果は2016年に移転し、3市場が「新青果市場(ベジフルスタジアム)」とシテイ青果(東京・豊洲市場)の鈴木敏行社長、福岡大同青果(福岡市中央卸売市場)の丸小野光吉社長が登壇し、市場流通ジャーナリストの浅沼進氏が進行を務めた。

市場のキヤラクターの①「品質管理」と「安全・安心」という観点から、卸売場全体の85%を定温化②「安全・安心」を新市場のブランドとし

て位置付けるため、食品衛生検査室での残留農薬検査の充実③卸売場中央に導入した幅20畳、長さ220畳の入荷通路帯などによる物流動線の効率化を挙げた。「これらの機能を活用し、これまでに以上に生産者、仲卸、小売に貢献したい」とする。さらに、アジア輸出への意欲を見せた。

流通の試験を昨年から行っていることを説明。また卸売場の有効活用として、空いている時間帯に仲卸と連携してセンター機能を発揮していく展望も示した。さらに、神明グループの東果大阪(大阪市中央卸売市場東部市場)との連携による物流効率化にも取り組み始めたことを報告した。

丸小野社長は、「西日本拠点市場という役割を果たすには、九州の荷を確保することが最大の命題」として、市場に隣接する「福岡大同青果ベジフルロジセンター」を活用しながら九州のハブ市場として物流拠点を構築していく必要があると

示した。一方、関西や関東の荷を集荷するには当該エリアの市場との連携も必要であることを示唆した。

デジタル化では、鈴木社長は「産地からスーパーまで一気通貫で使用できる統一コードが必要」と問題提起した。丸小野社長は「出荷段階からQRコードのついたパレットで荷の管理ができれば、検品作業が軽減できるうえ、トレーサビリティの確保にもつながる」と、産地の協力の必要性を挙げた。